

## 附属図書館概要発行にあたり



表紙には北方資料室が所蔵する古地図をあしらっており、デザインとしてもなかなかセンスがいい『北海道大学附属図書館概要』が成った。これを機に、新米館長として最近思うところを記しておくこととする。

現在いずれの図書館においても電子化は著しい。附属図書館はもちろんのこと、国立国会図書館、他大学、公立図書館、外国の大学図書館の蔵書をいながらにして検索できる。電子化された学会誌を研究室のコンピューターからいつでも読むことができる。雑誌掲載論文題名の一覧である『雑誌記事索引』をキーワードで探すことができるようになって久しい。記事を検索して呼び出すことができる新聞のCD-ROM版もある。「公文類聚」件名目録（国立公文書館）も検索できる。国会議事録は、例えば「浮浪児」の検索語で、「浮浪児」に触れた本会議・委員会のすべての議事を検索して読むことができる。

僕が学生の頃には、いずれも蔵書目録を繙くか、所蔵場所で探すしかなかった——北大の近くで、国会各種委員会議事録の全部を所蔵しているのは北海道議会図書室だけだった——のだから、電子化は当時とは比較にならない文字通り「雲泥の差」の利便さをもたらした。

コンピューターによる検索は便利であるが、ときどき不安に思うこともある。僕は数年前に図書館職員に、『雑誌記事索引』の検索がキーワードで行えるのは便利この上ないが、『雑誌記事索引』に収録してある論文題名の一覧があれば好都合である、どうせ一覧は作成してあるはずなのだから、分類に従った一覧作成を然るべき機関に提案してくれまいか、と依頼とも提案ともつかぬ話をしたことがある。現システムは、検索した論文はどれだけの論文のなかからヒットしたのかわからないので、その論文の位置を考えることができないのである。印刷された『雑誌記事索引』は、研究の動向を知る上でも最も重要な情報源であったが、現在はその機能は期待すべくもない。

CD-ROM版の新聞をキーワードで検索するのと、縮刷版を索引に従って繰るのは自ずから異なる。まして現物を一面ずつ繰るのはもっと異なる。新聞とは、何を報じたのかを知るために読むと同時に、当該記事の同時代的背景を探り、どう読まれたかを考えながら読むべき資料だからである。利便さは資料的価値を低める場合もあり得るのである。検索とは、ほとんどの場合、当該する検索対象事項以外を省略することであり、しかも何を省略しているのか検索者には皆目分らないのである。

附属図書館の歴史的水源地は札幌農学校講堂附設の「書籍室」である。このことは、図書館は学生の学習に供するためにもあるという観点からは興味深い事実である。印刷物の電子化は今後も一層進むであろう。大学図書館も、放っておいてもその機能全般を電子化しようと、人も資金も注ごうとするであろう。ところが、僕が身近に接する学生たちは、もろもろの電子化されたデータベースを有効に使いこなせているとは思えない。一例をあげれば、『雑誌記事索引』にキーワードとして何が登録されているかを知らずに、自分の知りたい事柄をキーワードとして検索して何もヒットしないと済ませる学生がいる。電子化されて便利な『雑誌記事索引』を用いたにもかかわらず、何も得られなかったので、文献リストは積み上がらないが、怠けたのではないというわけである。かつて、「本屋に行っただけ探している本が見つかりませんでした」「本屋にある本だけが本ではない。図書館でカードと文献目録を調べなさい」とのときやりとりを学生と繰り返した。それと同様の対応が現在も要るのである。電子化された情報を得るには、学生もそれなりに「面倒」とは闘わなければならない。そのための少しの「激励」は必要である。

学生が「面倒」と闘えるよう「激励」するのは、附属図書館と職員の仕事でもある。附属図書館と職員は、さしずめ学問の達成を求めて書物の海を航海する学生の羅針盤であり、かつ羅針盤を読む手助けの任に就いていてもいいおうか。電子化は今後も一層進むのだから、附属図書館と職員は学生のためにこそあとと記しておく意味はあろう。このような「激励」は、図書購入を希望してからパソコンで検索して借り出すまでに、附属図書館内で行われている作業のすべてについて学生の理解を得て、よき利用者となってもらうまたとない機会でもある。